

# 異文化理解の場としての留学生別科

留学生別科長 松井 かおり

2022年度、外国人留学生への入国制限が緩和され、春学期、秋学期合わせて39名の学生が朝日大学留学生別科へ入学しました。さらに、7、8月にはウクライナから3名の避難民学生が、また12月末には2名のアフガニスタン学生が特別入試で入学し、現在44名の学生が在籍しています。その国籍も多様で、10か国（ネパール、ベトナム、スリランカ、中国、バングラデシュ、ウクライナ、タイ、アフガニスタン、モンゴル、ドイツ）にのぼります。これは、朝日大学留学生別科の開設以来の多国籍ぶりです。

彼らは、教室では日本語を学んでいますが、同時に複言語使用（受容）者でもあります。母語が異なる者同士の接触場面では、複数の言語と、スマートフォンの翻訳アプリ、通訳機能を駆使しながら、時には学部の先輩や友達の力も借りてコミュニケーションをとっています。また日本語使用が求められるアルバイト先で、あるいは役所や銀行、病院では、初回は教員の力を借りても、その後は何とか自分の力で切り抜けます。彼らは、自分が利用できるあらゆる手段を使って、何をどう言えば相手に伝わるのか、日々考えているからといえるでしょう。ここでは、ことばだけでなく、日本の、瑞穂市の、朝日大学のルールを理解し、また相手をよく観察し、場に相応しい振る舞いをするために不断の努力を続けているといえます。

別科の教員も、学生を指導するために日々努力をしていますが、学生とのやりとりの中で、自身の異文化への関わり方を試される機会があります。「先生の都合で休講になった授業の補講に、なぜ自分の都合より優先して出席しなくてはいけないのか？」「運転免許を持っているのに、別科では自動車に乗ってはいけないのはなぜか？」など、別科ではこれまで当然のルールとしていたことへの思わぬ問いがあったときなどです。教員にとっては時としてストレスになります。なぜなら、改めてルールがルールとして存在する理由を自身に問い返し、わかりやすいことばで相手に伝え、さらにやりとりを続ける必要があるからです。しかし、教員にとっては「どうしてその質問がでてきたのか？」という学生の考え方の背景を知る機会となり、またそもそも自身がルールをどのように捉えているのかを再考する機会になります。その過程こそが、互いの文化への理解を深めるのではないかと思います。

別科では、日本語とならんで日本文化を教える、ということを目指していますが、異文化理解は、学生にとっても教員にとっても常に自己の変容を迫られる行為であり、不安やストレスを伴います。それを覚悟しつつ、だからこそ互いに関わることが楽しい、どう変わるかわからない自分たちの将来を楽しめる変革の機会として、学生とのやりとりを大切にしていけたらと思います。